

第5節 三方五湖の自然再生に関する環境協働活動

1. 活動の社会的背景

三方五湖(写真1)では、平成23年5月に「三方五湖自然再生協議会」が、福井県、美浜町、若狭町を主体として設立され、平成24年3月に「自然再生全体構想(写真2)」が策定された。この協議会には、漁業関係者、農業関係者、観光関係者、環境保全団体、行政、学校関係者、研究者ら、約50の団体、個人が名を連ねている。

三方五湖は、福井県若狭町および美浜町にまたがる5つの湖の総称であり、若狭湾国立公園、国の名勝、県の鳥獣保護区に指定されるなど、福井県を代表する傑出した美しい風景を誇る。それぞれの湖は水路によって結ばれ、久々子湖(くぐしこ)と日向湖(ひるがこ)は、日本海へつながっている。5つの湖はそれぞれ、淡水、汽水、海水によって満たされており、生息する魚類相も湖ごとに異なるなど、多様な生きものを育む変化に富む湖水環境である。中でも、ハス、イチモンジタナゴ、タモロコなどの貴重な魚類の存在は、ラムサール条約登録(平成17年)のより所ともなっている。

一方で、昭和50年代以降、水質汚濁が進み、湖岸では魚類や鳥類など多様な生き物のすみかとなる植生帯は激減し、大型猛禽類の飛来数も目に見えて減少している。さらには、近年特にオオクチバスやブルーギルなどの外来生物が増加しており、在来の生き物が減少し、姿を消しはじめたものもある。たとえば、ハスの確実な生息情報は平成10年以降途絶えている。

そうした中、昭和55年に三方五湖保全対策協議会が設立され、美浜町、三方町(現若狭町)の様々な地域団体が参加し、湖岸の清掃活動などが行われるようになった。また、「五湖生活学校」「みなおし会」「三方五湖浄化推進協議会」などの住民団体が次々と設立され、水質浄化の取組みが行われてきている。

学校教育においては、平成15,16年度に三方町が文部科学省から「環境教育実践モデル事業」の地域指定を受け、これをきっかけに、地域と学校と行政が一体となった環境学習をめざして「三方町環境教育推進協議会」「三方町教育研究会環境教育部会」が設立され、地域に根ざした環境学習が展開された。

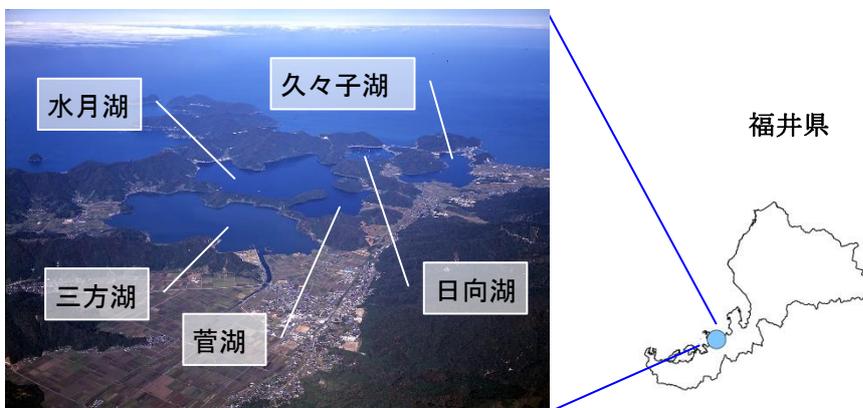


写真1 三方五湖

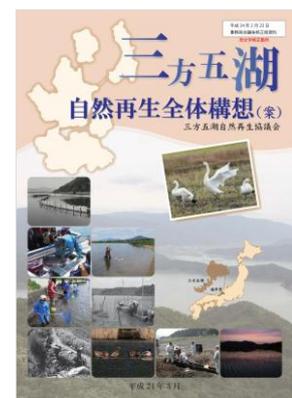


写真2 自然再生全体構想

平成 17 年には、環境保全団体である「ハスプロジェクト推進協議会（以下、ハスプロ）」が設立され、三方五湖流域の里地の保全を通して湖と里地の生き物のにぎわいを取り戻すことや、自然と人間との共生をめざす様々な活動を行っている。ハスプロの会員には、農業者、教育関係者、県の自然保護職、水産職、農林職、環境コンサルタント、研究者、野鳥の会会員など、様々な専門家たちがいる。仕事として三方五湖や周辺の環境保全に関わっている方も多く、公私ともにハスプロの情報やネットワークを生かして活動している。ハスプロの活動は精力的で多彩であり、この活動のベース、人的な資源やネットワークなしには、自然再生協議会の設立もなかったのではないかと考える。本調査では、ハスプロの活動を通じて、三方五湖における環境協働活動の現状と課題を探る。

2. 「ハスプロジェクト推進協議会」立ち上げの経緯、きっかけ

福井県海浜自然センターが、三方五湖へのオジロワシ、オオワシなど大型猛禽類の飛来数減少を危惧し、野鳥の会のメンバーらに声をかけ、平成 16 年からメーリングリストで情報の共有を始める。同じ頃、福井県自然保護センターが、周辺里地である「中山のカヤ田」が、昔の田んぼの生態系、原風景をとどめ、絶滅危惧種を多く有することに注目し、保全を検討し始める。両者が地元の自然愛好家らとともに、三方五湖と周辺里地の保護、再生を目的とする会の設立を検討。メーリングリストでの情報のやり取りを経て、平成 17 年 5 月に「ハスプロジェクト推進協議会」が設立された。

ハス（写真 3）とは、コイ科の魚で、オイカワやカワムツと近い種類の魚食性の魚である。日本では琵琶湖淀川水系と三方五湖に自然分布しているが、両者は遺伝的に異なる。三方町を南北に流れ三方湖に注ぐ川が「はす川」と名付けられているように、以前はたくさんいた魚であるが、平成 10 年を最後に確認されていない。ハスは湖の中の食物連鎖の頂点にいる魚であることから「ハスが戻ることを念頭に自然再生に取り組めば、多くの生き物も戻って来るであろう」と、ハスを三方五湖再生のシンボルに位置付け、その活動を「ハスプロジェクト」と名付けた。

3. 「ハスプロジェクト推進協議会」活動内容とその変遷

ハスプロの活動は、海浜自然センターや自然保護センターとの共催によるハス川の魚類調査やカヤ田での植物調査（写真 5）、水鳥観察会から始まっている。



写真 3 ハス



写真 4 ハス川お魚調査



写真 5 カヤ田の植物調査



写真6 復田前の様子



写真7 復田作業



写真8 サンショウモ

並行して周辺住民へ、かつての自然環境と社会環境、自然環境の変化、環境保全活動の過程の聞き取り調査を行い、ワークショップを開き、「三方五湖及び周辺里地における人と自然のネットワーク再生ビジョン（案）」としてまとめ、若狭町に提案した。

カヤ田に関しては、平成17年秋～18年に若狭町産業課の依頼で、「子ども達の農業農村体験学習推進事業」として復田を行った（写真6・7）。復田の結果、埋蔵種子からサンショウモ（写真8 環境省版RDB：絶滅危惧Ⅱ類、福井県版RDB：県域絶滅危惧Ⅱ類）、ミズオオバコなど、様々な希少種が芽生えた。近くの気山小学校も木道と水車の設置などを行い、自然観察会が定例化していった。

地域文化面では、平成18年には「五湖の恵み・多世代アンケート」を若狭町内の4、5年生を対象に実施し、1070名の回答を得ている。アンケートでは、湖や川で採れた魚介類とのかかわり、水辺での遊びについて、子どもたちに問いかけると同時に、親の世代、祖父母の世代と相談して回答する形になっている。結果として、50～80歳代では、8割以上の方が湖や川で採れた魚を食べた経験があるのに対し、10代では、5割以下にとどまるなど、食生活の変化が見て取れる。平成19年からは、若狭町内の小学生を対象に「昔の水辺の風景」絵画作品（写真10）を募集。縄文博物館やショッピングセンターなどで絵画展を実施。これまでの5年間で約700枚の絵が集まっており、三方湖総合研究グループ（東大・静岡大学・福井県立大学・福井県合同の研究プロジェクト）の支援により、データベース化、Webでの公開が行われている。

そのほか、鳥浜漁協の協力のもと、かつて湖周辺の子どもの遊びであった「シラウオ採り（写真11）」や「エビすき」などの体験活動、田んぼで魚を増やすための水田魚道の設置や水田でのフナ、コイなどの養魚実験、ブラックバスやウシガエルといった外来種の駆除など、多彩な活動を行っている。



写真9 魚食文化調査



写真10 昔の水辺の風景絵画展



写真11 シラウオ採り

表1 部会別活動内容と協働対象(22年度)

部会名	実施月	内容	協働の対象
自然環境再生部会	5～6月	田んぼでコイを増やす	鳥浜漁協
	6月	観音川河口での外来魚捕獲作戦	
	6月・8月	ハス川の魚調べ・湖のお魚調査会	海浜自然センター
環境教育活動部会	4～10月	カヤ田の整備 種まきから収穫まで カヤ田の赤米の販売	縄文博物館 ラ・しじみ 他
地域文化研究部会	6月	アメリカザリガニ、ウシガエル捕獲	鳥浜漁協
	6月	エビすき、ナマズとフナの稚魚探し	
	6～1月	「昔の水辺の風景絵画」 募集から鑑賞会・作品展の実施まで	若狭町の全小学校 三方湖総合研究グループ
	12月	カヤ田の藁でしめ縄作り	梅の里保育園
会長・事務局	7月	サマーチャレンジ	三方青年の家
	8月	環境学習・講演会・魚類調査 発表・出展	公民館・中学校 美浜町・福井県
	10月		
	2月	自然再生協議会視察	福井県

4. 「ハスプロジェクト推進協議会」の運営体制

会員数は、平成23年3月現在、正会員約80名、メーリングリスト会員約140アドレスである。役員は会長と事務局長のほか、事務局員が4名、監査役が2名いる。平成21年度から部会制をとっており、自然環境再生部会、環境教育活動部会、地域文化研究部会に分かれて活動している(表1)。法人格のない任意団体であり、会費はなく、専従職員はいない。

5. 活動等を支援した、もしくは活用した地域資源(人材・組織など)

- ①行政 福井県海浜自然センター 福井県自然保護センター
福井県自然保護課 福井県水産課
若狭町 縄文博物館
- ②学校 気山小学校 みそみ小学校 梅の里小学校 その他若狭町内の小学校
- ③団体 鳥浜漁業協同組合 三方湖総合研究グループ(東大・静岡大・県立大・県)

6. 活動を協働で推進することによるメリット、デメリット

1) 聞き取り調査の対象と内容

ハスプロの活動は多岐にわたっているため、会長、事務局と各部会の役員、計6名に聞き取りを行った。仕事で三方五湖や周辺の自然再生に関わっている方が多いので、職業も書き添えた(表2)。

表2 聞き取り対象者（ハスプロジェクト推進協議会）

N o	① ハスプロ内の役職 ② 職業	担当	主な協働の相手 (聞き取り内容)
1	①会長（平成20年～） ②元小学校校長	会の運営・活動全般	県 町 海浜自然センター 自然保護センター 小学校 研究者
2	①事務局長 ②縄文博物館勤務 僧侶		
3	①事務局長 ②環境コンサルタント	会の運営・活動全般	農業者 漁業者 他の環境保全団体
4	①地域文化研究部会 ②小学校教諭	昔の水辺の風景絵画展 生き物いっぱい泥んこ田んぼ（みそみ小総合学習）	海浜自然センター 鳥浜漁協 農業者 研究者
5	①環境教育部会 ②県園芸試験場勤務	カヤ田の管理・農作業 カヤ田での自然観察会	気山小学校 農業者
6	①自然環境再生部会 ②水産技術職員	ハス川の生き物観察会 田んぼで魚を増やす活動	海浜自然センター 鳥浜漁協

その他、協働活動の対象である鳥浜漁業協同組合長と福井県海浜自然センター所長等にも聞き取りを行った。

聞き取り内容は、ハスプロの方々には、それぞれの担当、活動内容と協働の現状、協働活動においてうまくいっていること、困っていること、今後に望むことなどをお聞きした。鳥浜漁業協同組合長には、ハスプロに留まらず、様々な主体との協働について、福井県海浜自然センター所長には、自然再生協議会も含めた協働全般について主にお聞きした。

2) 聞き取り内容のまとめ

それぞれの聞き取り内容から、①学校、②行政、③農業者・漁業者、④研究者の4者について、協働活動の内容とメリット、デメリットを以下にまとめる。

(1) 学校との協働活動とそのメリット、デメリット

地元小学校では、総合学習で「生き物いっぱい泥んこ田んぼ」作りや放棄田のビオトープ化を行っている。その時々必要に応じて、JAや漁協、海浜自然センター、農地水の会、ハスプロなどの協力を得ているが、関係者はお願いすると快く引き受けてくださり、学校側は協働活動においてストレスを感じたことはないようである。また、専門家や地域の従事者の方が協力して下さることで、小学生ながら水準の高い本物の学習ができているのありがたいと言う。

また、地域の大人たちは子どもたちの行動によって、大人が自分の住む地域のことを『値打ちのある地域だ』と気づき始め、子供たちの姿に感動し『手伝えることがあったらやらせてくれ』と積極的に草刈りなどをしてくれるようになった。そうである。「地域の人に昔の水辺の話聞かせてもらった次の日には、子供たちは自分たちで湖に魚を捕まえに行ったりし

ていた。」と相乗効果を喜ぶ声が聞かれた。活動を通して子ども、大人関係なく、みんなが『課題と夢を共有し、未来を一緒に作っていく仲間である』と感じているようである。

一方で、このような活動は打合せから後始末まで、かなりのエネルギーを使うため、本気でないとなかなか取り組めない。同じようなことをしても、続かず、広がっていかない現状があるようである。

一方、このような関係性もあるおかげでか、ハスプロでは「五湖の恵み・多世代アンケート」や「昔の水辺の風景絵画展」など、若狭町の小学校が全面的に協力してくれることによって、多くのデータが集まることに手応えを感じている。特に昔の水辺の風景については、当時は当たり前の風景で、写真に撮るほど特別のものではなかったことから、記録としてほとんど残されておらず、貴重な資料だという。毎年絵画展を行っているが絵を囲んで様々な世代が集まり、昔話に花が咲くという。

また、カヤ田で田んぼの管理（田植えの準備から稲刈りまで）や小学生対象の生き物観察会を行っているが、最近、この行事が遠足みたいな年中行事になっていて、パターン化しているようである。毎年担当者が代わり、毎回一からの説明、打合せが必要となっているのが大変なようである。

学校として行事化してくれるのは関係性が築かれていることでもあり、うれしいことであるが、形だけが残り将来世代の育成といった共通の目標である『何のためにやるのか』という一番大事なところの共有が、定型化されたことにより逆に抜け落ちているのかもしれない。また、学校側は平日昼間の行事、打合せとなってしまうが、ハスプロの中心メンバーは仕事を持っており、仕事を休まなければ対応することが難しい。学校との協働で大変なことのひとつと思われた。

教育関係者からも、平成 15,16 年は県の指定で環境教育を盛んにやっていたが、指定が終わったら取組みも終わってしまい残念だ、という声が聞かれた。指定校として予算が付いている時や特定の熱心な先生の力で環境教育が行われており、全体化・システム化までは難しいのが現状のようである。

(2) 行政との協働活動とそのメリット、デメリット

ハスプロと若狭町との関係は、『三方五湖及び周辺里地における人と自然のネットワーク再生ビジョン（案）』を作る時からあった。制作時期が、三方五湖がラムサール条約に登録される数か月前だったということもあり、役場の人もワークショップなどに熱心に参加し、庁舎内で回覧してくれていたようである。ただ、残念ながら一団体が作ったビジョンということもあったのか、全町的に浸透するには至らなかったそうである。

カヤ田については、平成 17,18 年に若狭町産業課の依頼で、「子ども達の農業農村体験学習推進事業」として復田が行われた。作業には町から日当が支給されている。その後は毎年、ハスプロが町に借用依頼を出してカヤ田を借りているという状態が続いたが、平成 23 年に県・町・ハスプロ 3 者で「生物多様性保全協定」が結ばれ、予算が付くようになった。それにより、それまでの『ハスプロが独自にやっている』という状態から、『行政との対等な立場

で協定を締結し、取り組みを継続している』という状態になり、町の広報誌でも紹介され、認知度も上がった。また、ハスプロ会員には、行政の人も環境コンサルタントの人もいるので、行政と組みやすいし、書類などややこしい手続きも苦もなくやってくれるので行政と組む際の、ハスプロの大きなメリットになっている。

一方、行政といっても、県には自然保護の専門職がいるが、町では一般職の方が担当になり、異動により数年で替わってしまう。一般職の方に専門知識は求めることはできないが、その担当になったら、行政職員に限った話でもないが、勉強をして一緒にやってみようという気持ちがあると、周りの人間も気持ちよく活動を進められるポイントになるようだ。協定書も重要であり、お金も重要ではあるが、より関係者の熱意や気持ちが共有されることが求められていることをヒアリングより感じられた。

多忙なことにも原因はあるのであろうが、現場を見ずして、机の上で計画を立てる行政マンが多いことは一般的に言われるところだ。しかし、地域の人々とともに取り組む際には、天気の悪い時、極寒の中での作業の苦労などを想像し、実感してやってほしいと地域は望む。そういった気持ちの通わせあいが、活動の協働を実際に進める大きな推進力になっているのであろう。

また、行政は、縦割りということもあり、それぞれのセクションが小さな企画と予算で地域に話をすることが多い。そのため、細々とした会議が多く、時間が取られることも指摘されていた。予算も効果的にまとめられることができれば、効果的な活動も展開できると思われる。三方五湖の保全に取り組む地域の人たちは、手を抜く気はないし、いつでも本気でやっている。だから、行政もその一員として、組織が一丸となって皆と同じように本気で取り組むことが求められ、再生協議会も立ち上がったのであろう。

行政関係者からは自戒の念も込めて次のような話を聞いた。「ラムサール条約登録後、平成 18 年に住民の方々にも委員になってもらって『三方五湖の保全に関する報告書』というものを作った。1 年間かけて立派な報告書ができ、役割分担も盛り込んだが、活動をする当事者との相談は事前にも事後にもなかった。具体的な実施計画もなかったので、文章を作るだけに終わってしまった。まさに、絵に描いた餅である。」と。筆者自身、研修として、自然再生協議会の全体構想を作る過程に若干関わったが、関係者の中から「前にも同じような計画を作ったが、何も進まなかった。計画を作るばかりでは意味がない」「会議ばかりでは、もううんざりする」というような意見が複数出ていた。その裏にはこのような背景があったとみられる。

(3) 漁業者・農業者との協働活動とそのメリット、デメリット

ハスプロでは、ハス川の生き物観察会や水田魚道、田んぼで魚を増やす活動を鳥浜漁協などの協力を得て行っている。最初は漁協に話に行っても、自然保護活動を行っている人のイメージとして、うるさいことを言われるのであろうと煙たがられたという。しかし、何度も通ううちに「目指しているものは同じだ」とわかってくれ、協力してもらえるようになったという。地域で生業を行っている人とじっくり話をすることが大事である。また、「漁師さんと話をすると、地元の昔からの様子、時代による変化を聞くことができるので、とても参考になる。」「地元の人に顔が利くので、水田魚道なども広げやすい。」「最近では行事でも一般組合員など 15~20 人が出てきてくれ、軽トラックや網などを出してくれる。」「漁協女性部

も、イベントなどで魚料理を出してくれるのでありがたい」という声も聞かれた。生業の方の協力は力強い。

漁業者の側からも、「最近では地元でも、湖の魚を食べたことがない人が多いので、いろいろな行事で実際に食べてもらうことができている」と語っていた。

一方、有用魚種の放流が義務となっている漁協の人たちにとって「在来魚の重要性」や同じ種であっても「遺伝的な差異」の問題などはなかなか理解してもらえない。以前、子供たちが川をよく見るようになるだろうからと在来ではない魚を買って川に放流しようとした人がいたという。自分のお金で買うような熱心な人なので、どう話したらいいか困ったという経験をもつ方もいた。研究者や専門家の意図する「自然再生」や「生物多様性の保全」と地元住民のイメージするものにはギャップがあり、活動の前提としてそれをどのようにすり合わせていけばいいかが重要であり、また難しい点である。

ほかの地域もそうであるが、『自然再生』と『生業』とは食い違うところが多く、研究者の意見と漁業者、農業者の思いが食い違うことは多々ある。漁業者、農業者には「この土地（湖）のことは自分たちが一番よく知っている」という自負があり、研究者となかなか相容れず人間関係や感情のもつれが出てくるのがよくある。自然と人との関わりの深さによって、真剣さの度合いも異なり、生活にどのくらい深く関わっているか、直接的な損得が出てくればくるほど真剣になり、喧嘩にもなる。また、離れている人は客観的に見ることができ、論理的に判断できるかもしれないが、言葉だけになりがちである。伝統漁法や有機農法なども研究者や行政が『こうすべきだ』というのは簡単だが、実際に労力が増える漁業者・農業者に対して、十分な想像力を持って考え、手当てなどがないと実際に進むことは難しい。

三方五湖でも漁業者は「湖は自分のもの」と誇りを持って思っている。ほかの地域の生業関係者でもよく聞かれるが、漁協関係者からもボランティアとして自分の意思により参加を選択できる人たちと、選択の有無がない生業関係者との違いや、それを背景に発言を考えてほしいという声が聞かれた。

ハスプロは「ハス」をシンボルにしている割に、湖での活動が少ない。環境活動に積極的な漁業者が三方五湖にもおり昔から湖を守ることをやって来ている方々が既にいるのである。そのため、ハスプロは地域の方々と補完できるように、メインの活動フィールドを「カヤ田」とし、地域文化を掘り起こす活動に力を入れている。

(4) 研究者との協働活動とそのメリット、デメリット

平成21～23年度に東京大学大学院農学生命科学研究科保全生態学研究室が中心となり、静岡大学、福井県立大学、福井県が共同研究を行う「三方湖総合研究プロジェクト」が行われた。三方湖水辺生態系の自然再生に貢献することを目標に、三方湖とその周辺生態系の環境研究等が行われた。平成22年には、若狭町と前述の東大研究室が連携協力協定を締結した。ハスプロも調査研究等に協力した。

そのことについて、地域からも「勉強会を開いたり、新年会に参加してくれたりとの交流が深まっている。地域に親しく入ってきてくれる研究者はうれしい。昔の水辺の絵画もデータベース化し、ホームページを作ってくれたことで、更に広がりができている。」との声も聞

かれた。「これまでと違っていろんな分野の研究者がプロジェクトを組んで入って来て、様々な角度から三方五湖と地元のことを研究してくれ、よい試みだと思う。」とも評価されていた。

しかし、市民にとって学者の言うことは難しく、机上の論理であるため現場に暮らす市民には受け入れがたいことも多い。もっと噛み砕いて、市民にわかりやすく説明してほしいという声もある。そのため、生業者との間で感情的にこじれてしまった事例もあるようである。

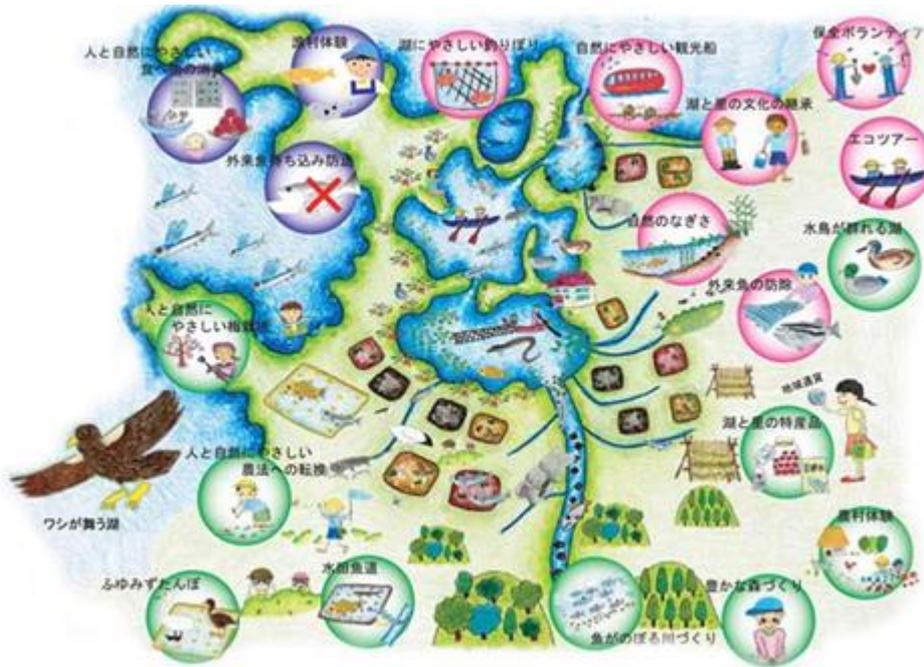


図1 三方五湖・湖と里のネットワーク再生ビジョン

7. 協働活動の成果の評価と今後の課題

1) 協働活動の成果の評価

ハスプロの皆さんに聞き取りを行って印象的だったのは、ほとんどの方が楽しそうに活動を語り、苦勞をあまり口にされなかったことである。ハスプロの成り立ち、会員構成を考えると「協働活動」は当初から当たり前のことであり、専従職員のいない任意団体が、7年間活発に活動を続けてこられた大きな要因でもあると思う。また、小学校教員や県の職員など、仕事の中で三方五湖の自然再生に関わっている方々にとっては、ハスプロの活動やネットワークは大きな支えになっていると思う。

ハスプロは一見、湖、里、田んぼ、川と、バラバラなフィールドで個々がそれぞれの活動をしているようにも見える。しかし、ハスプロで感じるのは仲のよさであり、一体感である。その要因は何か。1つ考えられるのは、設立して半年後に作った「三方五湖・湖と里のネットワーク再生ビジョン(案)」(資料1)の存在である。このビジョンをつくることで、様々な活動が1つの目標につながっていることがわかり、内部の一体感も得られたであろうし、

また、外部から見ても、この団体が何をしようとしているのかがわかり、協働しやすかったのではないかと思う。

三方五湖は広いエリアであり、関係者も多い。自然再生を進めるには、広い層の多くの人の関心を得ることが大切である。そのためにはどのような取り組みが必要か、ハスプロでは各分野での先行事例を作るために、それぞれが努力しているように感じる。

2) 今後の課題

協働活動の課題は何か。更に協働を進めるにはどのような行政支援が必要か。

(1) 学校との協働について

学校では、教員個人のやる気や力量に左右されるところが大きく、どの教員でもできるようなシステムが作られていない。「指定校」のときは取り組むが、それが終われば取り組みも終わってしまうことが多い。そもそも指定校とは、ある活動を進めるにあたって先行事例を作り、そこで培われた知恵や技を踏まえて、他の学校でも取り組みを広げていくためのものであるが、現実には、指定校が終わればその学校自体も取り組みをやめ、他の学校にその知恵や技が移管されることはない。指定校の時だけ大きな予算が組まれ、その後は予算措置がなくなっているのも一因と思われる。また、次から次へといろんな「指定校」が下りてきているようで、1つのことにじっくり取り組めない状況があるのではないかと思われる。

環境教育が今後ますます重要になって来ることは間違いないが、学校との協働の際の大きな課題としては、活動時間帯の問題がある。学校は平日の日中に打合せや観察会などを望むが、講師には本業の仕事があり、時間帯がバッティングしている。これは、高齢者の多い環境団体では問題にならないことだが、若い人の多い団体では難しい問題である。今後、「社会貢献活動のために仕事を休む」ということ等が当たり前になっていくとよいと思う。まずは、学校や教育委員会が、講師の勤務先へ早めに派遣依頼を出すことや相応の手当てを支給することが望まれる。教員では教えられないことを教えるために、仕事を休んで来ているのに、ボランティアと変わらないような手当しか出ないようでは長くは続かないと思われる。

(2) 行政との協働について

「行政の役割は何か、何ができるか、何をすべきかを明確にした方がよい」という指摘があったが、その1つの答えとして、自然再生協議会の設立があると思う。自然再生をめざした協働活動の、現時点での最も効果的な仕組みである。異なる主体が同じテーブルにつき、同じ権限の下で話し合いを進め、決定事項には法的な力がある。しかし、この仕組みを上手に使っている地域はそれほど多くない。是非、この仕組みをうまく使って、先進事例を作っていってほしい。事務局の役割は大きいと思う。

自然再生協議会事務局の中心的存在でもある県の職員は、「実施状況をチェックする機構、役割が必要であり、行政側が自分たちに義務を課して『年三回は総会をする』と宣言するなど、実施するための工夫、努力、縛りが必要だ」と言っている。

環境配慮型農業・漁業の振興についても、研究者や行政が『やれ』というのは簡単だが、実際に労力が増える漁業者・農業者への手当てはない。この解決策も、今後、自然再生協議会で議論していく内容だと思う。ところが、肝心の県の農林水産部が協議会メンバーに入っていない。二級河川である三方五湖を管轄している県の土木部も入っていない。自然再生推進法の画期的なところは、環境省が主導して、国交省、農水省を巻き込む法律にしたことで

ある。三方五湖は県の管轄なので、安全環境部が主導して土木部、農林水産部を巻き込まないと意味がない。環境配慮型の農業・漁業、公共事業を進めるには、これは必須である。

地域も本気でやっているのだから、行政も本気で取り組んでほしいと地元も言っている。また、「それぞれの部署が小さな事業と予算でやって来るのではなく、パイプをまとめて、太いパイプで、大きな予算で持って来てほしい。」とも言っているが、それが、自然再生協議会を経て、行政がなすべきことではないかと思う。

自然再生協議会については、「活動が大きく広がるのはいいことだが、大きくなる過程で抜け落ちてしまう部分がある。これまで、個人レベルで話をして、お互い理解しあって進んできたことが、たくさんの人相手だと大切な部分が伝わらず、形だけになってしまうような気がする。会議も大人数になると、広く浅くなってしまう。」と懸念を感じている声も聞かれた。対策として、正式な会議だけでなく「気軽な集まり」をどんどん持つていくことをあげる。また、「グループや個人でも気軽に利用できる少額の助成金を作り、個人の思い付きや実験的な試みをしやすくするとよい」こともあげる。こういった細やかな配慮とともに、事業を進めて行くことが望まれる。

全体構想では「自然再生にかかわる情報システムの構築」として「三方五湖周辺地域に関する情報が集まり、発信されるシステムづくり」「人材バンクづくり」「何でも相談窓口の設置」などがあげられているが、このようなプラットフォームづくりを行政が行うことで、ハスプロなどの環境保全団体が動きやすい環境が整備されていくと思われる。また、現状では、自然再生協議会に対する予算は、国も県、町も驚くほど少ない。実施段階では、相応の予算措置が講じられることを期待する。

8. 参考文献・引用資料

- ・ 「三方五湖及び周辺里地における人と自然のネットワーク再生ビジョン（案）」 ハスプロジェクト推進協議会、平成 17 年
- ・ 「三方五湖の保全に関する報告書」三方五湖の保全・活用に関する検討委員会、平成 18 年
- ・ 「第 7 回定期総会資料」ハスプロジェクト推進協議会、平成 23 年
- ・ 「三方五湖自然再生全体構想」三方五湖自然再生協議会、平成 24 年
- ・ ハスプロジェクト推進協議会HP <http://www.komusyoukai.com/~hasupro/>
- ・ みんなの三方五湖マップHP <http://www.mikatagoko.jp/>